

Congratulation

附属大塚特別支援学校
校長 柳本雄次



大学を出て社会人の一歩を附属桐が丘養護学校で始め、このたび附属大塚特別支援学校で終えることになりました。この間皆様には大変お世話になり、感謝に堪えません。

桐が丘では中学部の重複学級の担任となり、知的障害を考慮した指導を行っていましたが、まだ話ができる子どもたちが多く、誕生会のたびにケーキ屋に出かけたり、調理のためスーパーに買い物に行ったりしたことが楽しく思い出されます。

その後、何かの縁で大塚に行くことになり、10年目を迎えます。大塚は学生の時教育実習をした学校で懐かしかったのですが、すでに実習の指導教員はおらずある面ほっとしました。儀式だけでなく、多くの学校行事を通して子どもたちとも触れ合い、エネルギーをもらいました。中でも現場実習で生徒たちの一生懸命に働く姿には感動もしました。改めて人間にとっての労働の意味を考える契機ともなりました。

今年度になって急に桐が丘の敷地に大塚等を合わせた知的障害・重複障害の統合キャンパスの構想の実現が浮上し、その対応に追われました。単なる複数障害種の学校ではなく、筑波大学が国内外に誇れる特別支援教育施設として、皆に夢のある学校になるよう祈るばかりです。

附属高等学校
校長 新井邦二郎



このたび大学の定年退職に伴い附属高校の校長を退任することになりました。任期満了まで1年を残しての2年間、皆様のご厚情に心より感謝を申し上げます。

附属学校には、3つの宝があると感じました。第1の宝は生徒たち。学生時代、当時の学生部長から学生は電車(大学)の乗客に過ぎないと言われ、そのような認識だけはもちたくないと言われ、心に残っています。2年間、一人ひとりの生徒の命はもとより人生にかかわることの重みを感じました。第2の宝は教師たち。それぞれが「光り輝くもの」を持っている教師に敬服しました。これには附属教員のブランドプレッシャーが良い形で能力形成に働いているように感じました。第3の宝は附属の伝統。長い年月にわたり先人たちが作り上げてきた教育のシステムは「知恵の結晶」であり、実によくできていると感じました。ただ現在、多様な生徒に対応して新しいシステムを作り出していく必要も感じました。

ほんとうは第4の宝として、学び舎を挙げたいところですが、校舎は建て替えを必要としていることが明らかであります。

退職のご挨拶

朝永振一郎記念 第4回「科学の芽」賞の授賞式・発表会開催!

附属学校教育局 教授
小林 汎

12月19日(土)午後1時より、朝永振一郎記念第4回「科学の芽」賞の表彰式・発表会が、約110名が参加して、筑波大学の学生会館ホールにて行われました。

表彰式は、山田信博学長より、受賞者一人一人に表彰状と記念の盾が贈られ、受賞者と握手をしてその努力をたたえました。今年度は20件の作品が「科学の芽」賞を受賞しましたが、小学生部門(個人10件)では、3回目の受賞、姉妹とともに受賞した児童もいました。中学生部門は8件、このうち4件は団体研究で、今年男子生徒が頑張っていたのが特徴的でした。今回初めて海外日本人学校の生徒が受賞しました。高校生部門は2件(個人1件、団体1件)、地学分野の研究からの受賞者が初めて出ました。また、前学長の岩崎洋一先生(名誉審査委員長)からメッセージをいただきました。

発表会は、例年と同様に、小学生部門と中学生部門はそれぞれインタビュー形式での発表、高校生部門はパワーポイントを使って5分間の発表を行いました。さすが高校生と感じさせる非常にうまい発表でした。最

後は、学生会館のレストランで学長を囲んでの懇談会、参加した保護者の方々の一言から「科学の芽」を育てている家庭の様子が分かり印象的でした。

今年度の応募件数は1,158件(小学生部門:596件、中学生部門:530件、高校生部門:32件)、昨年度(1,248件)とほぼ同様の件数でした。今年からは審査体制を強化して審査にあたりましたが、応募作品のレベルアップで審査委員は嬉しい悲鳴を上げていました。



国際教育・国際交流のこの1年

附属学校教育局
教授 坪田耕三



学校や台湾の学校との交流に力を注ぎ、生徒自らの研究を先方で発表している。坂戸の生徒は卒業論文作成のため海外取材を必要とするものにその助成を行い、実際に海外取材を実施している。

さらに、教師教育の視点から見れば附属小学校では、韓国との「授業研究会」を実施し、彼の地で様々な教科の授業研究会を実施している。また、JICAや筑波大学CRICEDとの協力で、中南米や東南アジアや、アフリカなどへの「理数教育等授業改善」の指導を行うため、教師が派遣されている。

さらに、各特別支援のいずれの学校も鋭意努力しており、生徒および教師の国際教育への貢献が目覚ましい。桐が丘特別支援では、韓国の三育再活学校等との交流、視覚特別支援でも国立ソウル盲学校等との交流、聴覚特別支援でもやはり韓国の私立サムソン聾学校等との交流が特徴的である。大塚特別支援も韓国との連携事業に足場を作るため現在活動中であり、久里浜特別支援もイギリスの自閉症教育の現状を視察する事業を実施している。

筑波大学附属学校の国際教育活動については、これまでの実績をまとめて世に問えるものを作成していく計画である。



キャンパス・リニューアルを迎える附属学校教育局

附属学校教育局 教授 江口勇治

指導教員が勤務する狭い意味の局は、この一年以上仮住まいする。新しいキャンパスができるまでの間、新たな装いにふさわしい局の構想が練られるであろう。まさに「再生」を待ち、この1年は仮住まいで、局の力をためることに違いない。

ときに、東京キャンパスは個人的には思い出深い校舎である。かなり前に今の学舎で学んだ者の一人として、いよいよ「東京教育大学」はその形を消し、心の中で「遠くなりけり」の感である。

ただ新しい装いの若人の集う校舎は、また新しい息吹で充ちてくるに違いない。新しい建物への移行を成長の糧とするであろう。今後附属学校教育局が、一層附属を束ねる中枢として、生まれ変わっていくことを期待するばかりである。

筆者も少しだけは手伝いができるかもしれないが、

筆者にはその余裕はないかもしれない。新鮮な精神で、リニューアルに向き合える人たちに今後を託したいのが本音である。

